

Library News

7号 11月号 担当：濱野、村上

十一月は季節の変わり目ということで、秋冬にぜひ読みたい二冊の本を紹介したいと思います。寒暖差の激しいこの時期、過ごしやすい部屋で読書でもいかがでしょうか！

『伊豆の踊子』 川端康成 / 新潮文庫

此方の本には、ノーベル文学賞を受賞した川端康成さんの書いた『伊豆の踊子』をはじめめとした『温泉宿』『禽獣』『抒情歌』の四編が収録されています。特に私は『伊豆の踊子』と『温泉宿』の二つをお勧めしたいと思います。

二十歳の旧制高校生である「私」が一人伊豆の旅に出たことから始まる『伊豆の踊子』。彼は旅の途中でたどり着いた峠の茶屋で、旅芸人の一行と出会います。私に座布団を譲った十七ほどに見える踊子、そしてその連れである四十代の女一人に若い女二人、そして宿屋の印半纏（背・えりなどに家号・氏名な



どを染め抜いたはんてん）を着た二十五、六の男。彼女たちと旅をした「私」の旅の結末とは。若く、青い主人公と踊子たちの切ない人間模様を描いた、読んだ後に思わずほつと息をつきたくなるような作品です。

また、娼婦として生きる様々な女性たちを生々しく綴った『温泉宿』。

秋から冬にかけての季節と共に流れる彼女の生き様からは、世知辛さをひしひしと感じます。『彼女等は獣のように、白い裸で這い廻っていた』という獣と白い裸という言葉の対比が使われた初めの一文が、より彼女たちの奇妙さや歪みを私たちに表しているような気がします。性格の大きく異なる四人の女たちに待ち受ける現実と不条理な世界の歪み。青春らしい物語の『伊豆の踊子』と合わせて読みたい、冬のような感傷的になる作品です。